私が死んで満足ですか？

～疎まれた令嬢の死と、残された人々の破滅について～

Characters

登場人物紹介

アステル
ロロナの死について調べる、謎の青年。ロロナとかつて面識があるらしく……？

ロロナ・リュース
リュース伯爵家の長女で、王太子の婚約者。その美貌と優秀さから遠巻きにされ、「心を持たぬ紫水晶姫」と評されている。

カイゼル
リュース伯爵の門下生。貴族の子弟のようだが……？

シェザム
リュース家に代々仕える管財人。責任感が強く、義理堅い。

ゼリオ
王都で商売を営む、ミイシ商会の商会長。

ベルビュート
王太子で、ロロナの婚約者。ルミナと通じ、ロロナに婚約破棄を突きつける。

ルミナ・リュース
ロロナの異母妹。贅沢好きで、口うるさい姉を疎んでいる。

序章

大陸の北に位置する、ニルナ王国。
山脈にある水源からもたらされる河川の恵みと、豊富な資源により繁栄する国だ。
そのため他国から領地を狙われることも多く、幾度となく戦火に晒されてきた。
強大な軍事国家である隣国、ステラ帝国と同盟を結んだことや、十数年前の戦で勝利を収めたことにより、ようやく安定した国力を手に入れ、平和な時代を享受している。
今夜、王城では貴族子女が通う王立学園の卒業記念式典が開かれている。
豪華な装飾が施されたきらびやかな大広間には、楽団が演奏する優美な音楽が流れており、集まった卒業生とそのパートナーや親族たちは、一様に浮かれ顔で未来への希望を語り合っていた。
「皆に伝えたいことがある」
そんな和やかな空気を裂くような低い声が響き渡り、客たちは会話を途切れさせた。奏者たちも手を止めたせいで、広間には突然の静寂が訪れる。
声の主は、壇上に立つ王太子ベルビュート。
王族の証である赤い髪と緑の瞳を備えた精悍な顔立ち。青年から大人の男性へ成長をはじめたた

くましい体躯。まだ十九歳という若さではあるが、彼の表情はこれからこの国を支えていくという自信に満ちているように見えた。

「この時をもって、このベルビュート・ニルナはロロナ・リュースとの婚約を破棄する」

会場が揺れるほどのざわめきが起こる。

突然の発言に、誰もが混乱しているようだった。

ある者は眉をひそめ、ある者たちは顔を見合わせ小声で何ごとかを囁きあっている。

困惑と驚愕が広がる中、一人の少女が前へ進み出た。

「殿下……いま、なんとおっしゃいましたか？」

「聞こえなかったのか、ロロナ。俺はお前との婚約を破棄すると言ったんだ」

深紅のドレスを身にまとい、銀色の髪をきっちりと結いあげて細い首筋を晒す美しい少女の名は、ロロナ・リュース。

十八歳とは思えないほど大人びた顔立ちのロロナはリュース伯爵家の令嬢であり、この卒業記念式典に在校生代表として出席していた。

にもかかわらず、その横には誰もいない。

本来ならば婚約者であるベルビュートにエスコートされているべきなのに、二人の間には誰の目にもわかるほどの距離が存在していた。

ロロナは壇下からベルビュートを見つめ、菫色の瞳をわずかに細めたが、その表情からはなんの感情も読み取れない。

「本気でおっしゃっているのでしょうか」

紅の塗られた唇から紡がれる声は硬質で、怒りも悲しみも感じていないようだった。

「ロロナ……本当にお前は可愛げのない女だ。俺の言葉を聞いても動揺するそぶりすら見せないとは、さすが『水晶姫』だな」

侮蔑の滲んだ言葉を発するベルビュートは、忌々しいとでも言いたげに口元をゆがめた。

「殿下からそのように呼ばれる日が来るとは思いませんでした」

「はっ……『心を持たぬ紫水晶』とはよく言ったものだ。笑うことも怒ることもない冷徹なお前には似合いの二つ名だろう？」

あからさまな煽りを受けたにもかかわらず、ロロナの表情が乱れることはない。

そのことが不満なのか、ベルビュートは眉間に皺を寄せる。

「ベルビュートさま!!」

そんな二人の空気を壊すように、ベルビュートの背後から突如として小柄な少女が現れた。

「お姉さまにそんなひどいことを言わないでさしあげて……あまりにかわいそうです」

「ルミナ……お前は本当に優しいな」

ゆるくウエーブのかかった飴色の髪に、とろけた蜂蜜のような瞳をした愛らしく可憐な少女は、ロロナの異母妹であるルミナだ。

先日ようやく十六歳となり社交界入りしたばかりのはずなのに、ルミナは自分がここにいるのが当然だというような顔をしてベルビュートの横に並んだ。そして瞳を潤ませながら、その腕に縋り

つく。
二人の姿はまるで仲睦まじい恋人同士にしか見えず、周囲のざわめきが色濃くなる。
ベルビュートはルミナを愛しげに見つめた後、鋭くも冷たい視線をロロナに向けた。
「……ロロナ。お前は母親が貴族ではないという理由だけで、妹であるルミナを虐めていたそうではないか。そのような悪辣な女を、俺は妻に迎えるつもりはない」
「それが理由ですか？」
「いいや、それだけではない。お前はいやしくも伯爵家の一員でありながら、市井で平民にまざり商売をしているそうだな。俺の婚約者という肩書きを悪用し、私腹を肥やしているという噂まである。そんな品性の欠片もないお前が、王妃になれるはずがないだろう」
「……さようでございますか」
ベルビュートの言葉にロロナはわずかに目を伏せるが、表情に変化はないままだ。
周囲から「やはり感情がないというのは本当なのか」「さすがは『水晶姫』だ」と心ない囁き声が漏れはじめても、動揺するそぶりすら見せない。
「かしこまりました」
静かな声で返事をしたロロナは、指先でドレスの裾を軽くつまみ、深く頭を下げた。
その美しく完璧なしぐさに、周囲はいま起こった騒動を忘れたかのように、ほぅとため息をこぼす。
ベルビュートさえも、彼女のしぐさに呆けたように目を奪われていた。

「それでは、失礼いたします」
ふわりとドレスの裾をなびかせ、ロロナは颯爽と壇上の二人に背を向けた。その動きはまるで舞台に立つ女優のように凛としたもので、誰もが言葉を忘れてその姿に見惚れている。
ロロナの靴が立てた優雅な足音に、ようやく我に返ったベルビュートが「おい！」と叫ばなければ、彼女はそのまま会場を出ていってしまっただろう。
「まだ何か？」
呼びとめられたのが意外とばかりに振り返るロロナに、ベルビュートは慌てた様子で表情を引き締め、わざとらしく咳払いをした。
「お前、何か申し開きはないのか？」
「ございません」
「なっ……なんだと！」
うわずった声で叫ぶベルビュートの横では、ルミナが困惑の表情でロロナを見つめている。
婚約破棄を告げた者と告げられた者という立場が、まるで逆転したような構図だった。
「お話は以上ですか？　では、婚約解消の手続きはベルビュート様にお任せいたします」
「おい!!」
これ以上は時間が惜しいとでも言うように、ロロナはためらいなく会場を出ていく。
舞台の幕引きのような、とても清々しい去り様だった。
残されたベルビュートは「最後まで可愛げのない女だ！」と苦し紛れに叫んで、無理やりにその

場を収めることしかできなかった。
突如として起きた王太子と伯爵令嬢の婚約破棄騒動は、その夜のうちに式典の参加者の口から王都中に広まることになる。
未来の王妃として社交界に名を馳せていたロロナが抱える昏い噂に皆が熱狂し、早く誰かと語らいたいと夜明けを待ちわびた。
その翌日、さらなる衝撃的な知らせが彼らにもたらされた。
伯爵令嬢ロロナ・リュースが事故死した、と。

第一章　終わりのはじまり

王太子ベルビュート　一

「ロロナが死んだ、だと？」
知らせを受けたベルビュートは目を見開いて固まった。
ようやく自室に戻り、疲れ切った身体を休めようとしていた矢先のことだった。
思わずよろめきながらも、椅子にしがみつくようにして腰を下ろす。
「なぜこのタイミングで……」
ぐったりとうなだれながら頭を抱えたベルビュートは苛立たしげに舌打ちし、前髪をぐしゃりと握りつぶした。
「どうせ死ぬのならば、もっと早く死んでくれていればよかったものを！」
怒声とともに机を蹴りあげると、その場に控える執事やメイドたちが身体をすくませる。
ほんの数刻前、ベルビュートは国王と王妃に、昨夜の騒動について釈明をしたばかりだった。
「本当に最後まで忌々しい女だ」
疲れ切った様子で苦言を呈する両親の顔を思い出し、ベルビュートは長いため息をこぼす。

事前になんの相談もなくロロナに婚約破棄を告げたことを、国王も王妃もひどく憂いていた。
王族ならばもっと手順を踏み、騒動にならぬよう行動を起こすべきだったとベルビュートを非難したのだ。
幸いだったのは、婚約破棄そのものを撤回しろと言われなかったことだろう。
『王太子として自らの発言には責任を持て』
国王の静かな言葉を思い出し、ベルビュートはふんと鼻を鳴らす。
『もちろんです。この婚約破棄に関わる責任や賠償はすべて自分で賄います』
もとよりそのつもりだったとベルビュートは国王に宣言したのだった。
（俺の行動は英断だと讃えられるべきだ。ロロナは王妃にふさわしい女ではなかった）
ロロナが死んだことでその証明は難しくなったが、考えようによってはずいぶんと話が早くなった、と気を取り直す。
婚約破棄と言ってしまえば簡単だが、その手続きは意外と手間がかかる。
貴族の結婚は契約だ。正式な書面を作り、貴族院と教会の許可を得て締結される。
もし破棄するとなれば、双方の同意を示す書類と違約金を用意しなければならない。
だが、片方が死んだとなれば話は別だ。死別は契約違反ではない。
ベルビュートは、ロロナの死のおかげで婚約破棄に伴う事務作業と高額な違約金を支払う義務から解放されたのだ。
「最高の遺産だよ、ロロナ」

うっとりと微笑むベルビュートの顔に、王太子らしい気品は欠片もなかった。

ロロナの生家であるリュース伯爵家は歴史こそ古いが、特に大きな影響力があるわけではない平凡な伯爵家。なのになぜ、王太子ベルビュートがロロナと婚約することになったかといえば、ひとえに十数年前の戦が原因だった。

ロロナの父であるリュース伯爵は、その戦で将として前線に立ち、大きな戦果を上げた。英雄リュース伯爵の活躍がなければ、ニルナ王国は負けていたかもしれない。その功績に対する褒美の一つとして、彼の娘ロロナを王妃として迎え入れるという約束がなされた。

婚約はベルビュートが四歳、ロロナが三歳の時だ。

だから物心ついた時、ベルビュートの横にはもうロロナがいた。

王族として生まれ、同じ年頃の子どもと触れ合う機会がなかったベルビュートにとって、ロロナは唯一ともいえる交流相手だった。

机を並べて学びながら、ともに成長し、デビュタントの日にはファーストダンスを踊った。

十四年もの長い間、隣にはずっとロロナがいたのだ。

「……」

一瞬、ベルビュートの胸に苦いものがこみあげる。

その感情がなんなのかわからず、ベルビュートは思い切り顔をしかめた。

深い愛や恋心があったわけではないが、ともに過ごした日々で積み重ねた情のようなものは確かにあった。結婚してもそれなりの関係を築いていけると信じていた頃もある。

だが、いつしかベルビュートはロロナのことを疎ましく思うようになっていた。

ロロナは優秀すぎたのだ。どんな勉学においてもベルビュートの一歩先を行く。追いついたと思っても次の瞬間には遥か高みに登っていく。それが歯がゆかった。自分を支え、隣を歩くはずの存在が、自分よりも優秀であるという事実は、ベルビュートの矜持をひどく傷つけた。

愛らしい少女から美しい女性に成長する姿に、感動よりも先に畏怖を感じてしまったのも大きい。

何があっても怒ることも声を上げて笑うこともないロロナ。感情があるのか不安になるほど表情を変えないことから、瞳の色になぞらえて『心を持たぬ紫水晶』とまで呼ばれるほどに無機質で神々しい美しさを湛えるロロナが、ベルビュートは恐ろしかったのだ。

触れれば壊れてしまうのではないか、本当は腹の中で無能な自分をあざ笑っているのではないか。ベルビュートの心を不安が蝕むのに、そう時間はかからなかった。

いまのベルビュートがロロナに対して抱く思いは、もはや憎しみと失望だけのはずだったのに。

「……まあいい。これで俺はルミナと婚約できる。あいつだってリュース伯爵家の娘だ、約束を反故にするわけではない」

まるで自分に言い聞かせるように呟いて、ベルビュートは自分の中に湧きあがった感情に蓋をしたのだった。

異母妹ルミナ　一

「お姉さまが死んだ？」

真っ青な顔をした執事長が持ってきた知らせに、ルミナは急いで両手で顔を覆った。

その姿は、周囲からしてみれば姉の死を嘆き悲しんでいるように見えただろう。

だが、実際には笑い出したいのを必死にこらえているだけだ。

手のひらに包まれた口元は、三日月のごとき弧を描いている。

（なんてこと、あの邪魔なお姉さまがいなくなるなんて!!　これですべて私のものだわ！）

叫び出したいのを呑みこむと、身体がふるふると震えた。

「ルミナ様……ああ、なんとおいたわしい」

執事長は彼女が泣いていると思ったのだろう。震えるルミナの肩にショールをかけて椅子に座らせる。

「ロロナお姉さまはどうして死んだの？」

顔を両手で覆ったままルミナが問えば、執事長はためらいながらもゆっくりと口を開いた。

「馬車が事故を起こしたのです。それはひどい有様で……ロロナ様のお身体は、その……」

「どうなったというの？」

「お顔が……これ以上はお許しください……」

「そう……しばらく一人にしてちょうだい……おねがい……」

か細い声で訴えると、執事長やメイドたちは静かに頷き、部屋を出ていく。

残されたルミナは、完全に人の気配がなくなったことを確認してからようやく顔を上げた。

「ふふふ！　やった！　やったわ！　なんて幸運なの！」

淑女としての慎みを忘れてソファにあおむけに横たわると、子どものようにはしゃいだ声を上げる。

晴れ晴れとした表情には、姉の死を悼む気配など欠片もない。

「これでベルビュートさまとリュース家のすべてが私のものになるのね！　素敵！」

嬉しくてたまらないといった様子で、ルミナはクッションを抱きしめた。

ルミナにとって二つ年上の異母姉であるロロナは、目の上のたんこぶでしかなかった。

いつも澄ました顔で、勉強や礼儀作法を完璧にこなす品行方正なロロナ。

顔立ちは女神のように美しかったが、それだけだ。声を上げて笑うことも、足を踏み鳴らして怒ることもないロロナのことがルミナは大嫌いだった。

「あの嫌な女がいなくなってせいせいするわ」

吐き捨てるように口にしながら、ルミナは愛らしいと称される顔を嬉しそうにゆがめた。

二人はリュース伯爵家の娘ではあったが、母親が異なる。

ロロナを生んだ前リュース伯爵夫人はしがない子爵家の令嬢で、菫色の瞳以外は平凡な顔立ちだった。飾られている肖像画を目にするたび、どうしてこんな女からロロナが生まれたのだとルミ

ナは不思議に思ったくらいだ。
　対して、ルミナの母であり現リュース伯爵夫人であるベルベラッサは華やかな美女だ。ルミナと同じ飴色の髪に蜂蜜色の瞳。華奢な身体と上品な立ち居振る舞いは完璧な貴婦人のそれで、ルミナはベルベラッサが鏡の前で美しく着飾る姿を見るのが何より好きだった。
「これでもう誰も私とお母さまを馬鹿になんてできないわ」
　そう呟くロロナの瞳は欲望にきらめいていた。
　ベルベラッサは平民の出だが、貴族の血を引いている。祖父がとある貴族の庶子だったのだ。
　その美しい見た目は高貴な血統がもたらした恩恵だと祖父は喜び、彼女に最高の教育を施した。そして縁者を頼り、行儀見習いの名目で貴族の屋敷に出入りさせたという。
　努力の甲斐あって、幸運にもベルベラッサは妻を亡くしたばかりのリュース伯爵の目に留まり、ルミナを身ごもった。
　平民の生まれでありながら伯爵夫人にまで登り詰めたベルベラッサの物語はルミナの自慢だったが、周囲はそうではなかった。成りあがりの毒婦だと見下す者は少なくない。母は何を言われても平然としていたが、ルミナは悔しくてたまらなかった。
　父である伯爵はいつも忙しいらしく、ほとんど屋敷にいることがない。母が苦しんでいることすら知らないのかもしれない。
　せめて自分だけでも母の足枷にならぬように、ルミナは必死に努力した。礼儀作法をはじめ、あらゆる勉強に必死に取り組んだ。

　だが、どうあがいてもロロナには敵わなかった。
　周囲はルミナの不出来さを嘲るどころか、相手がロロナなのだから仕方がないと慰め甘やかした。その優しさは逆にルミナのプライドをひどく傷つけたのだった。
「ふ、ふふ……でももういいわ。だって私がリュース伯爵家を継ぐんだから」
　この国は男女問わず、第一子相続が原則。
　だがリュース家の第一子であるロロナは王太子ベルビュートの婚約者で、いずれは伯爵家を出て王家へ嫁ぐ身だ。ルミナは自分がリュース家を相続するものだと信じていた。だから幼い頃はロロナがどんなに優秀でも許せたのに。
『ロロナお姉さまが次期当主ですって!?』
　ある日突然知らされた事実に、ルミナは激しく打ちのめされた。
　第一子が別の家門に婿入りや嫁入りする場合、爵位を掛け持ちできるという法律があったのだ。それは第一子を体よく追い出し家門を乗っ取るという悪事が横行したことにより生まれた古いもので、ルミナは存在すら知らなかった。
　ロロナはベルビュートに嫁いだ後もリュース家の家門を背負い、いずれ生まれる子どもにリュース伯爵位を継がせるつもりだと宣言したのだ。
「ルミナがいるのに！」
　その時のことを思い出したルミナは、怒りに任せてクッションを殴りつけた。
　跡継ぎになれないルミナは、ほんのわずかな財産を分与されてどこかの貴族に嫁ぐことになるの

だろう。
　そんなの納得できなかった。どうしてロロナばかり優遇されるのだ。血統、見た目、才能。何もかもを持って生まれたくせに。王太子の婚約者という地位だけでは飽き足らず、伯爵家のすべてを手に入れようとするロロナが憎らしくて、疎ましくてたまらなかった。
「残念だったわね、お姉さま。死んでくれて助かったわ」
　ロロナが死んだいま、リュース家の跡継ぎはルミナ一人。
　誰がなんと言おうと、全部ルミナのものだ。
「ベルビュートさまにお会いしなくっちゃ！」
　声を弾ませながら立ちあがる。
　たとえ喜ばしい死であっても、表向きは悼まなければならない。
　なるべく喪に服して見えるような大人しいドレスを選ぶため、ルミナは鼻歌交じりでクローゼットの扉を開けた。

管財人シェザム　一

「ロロナお嬢様が亡くなっただと⁉」
　真っ青になって叫んだのは、リュース家の管財人であるシェザム・ベルマン。
　まだ二十六歳という若さだというのに、その顔には拭いきれぬ疲れが滲み、目の下には深く濃いクマが浮かんでいる。
　シェザムは祖父の代から伯爵家に仕える家系に生まれ、早逝した父に代わり、若くしてリュース家の管財人となった。
　不在がちな伯爵に代わり、いまではリュース家の金回りを一手に管理している。
　伝令が息を切らせ届けてくれた電報を受け取ったシェザムは、蒼白な顔のまま執務室の椅子から一度は立ちあがるも、足を震わせずるずると床に座りこんでしまった。
「おしまいだ……何もかもがおしまいだ……」
　虚ろな瞳のまま震える声でそう呟いたシェザムは、机にしがみつくようにしてなんとか立ちあがる。そして震える手で引き出しという引き出しを開けて、何枚もの書類を机の上に引っ張り出した。
　乱雑に散らばるその書類には、どれもロロナのサインがしてある。それらはすべて借用書だった。
「伯爵に……伯爵に知らせなければ！」
　悲痛な声で叫んだシェザムは書類をすべて鞄に突っこむと、転がるように執務室を飛び出す。
　リュース家は借金まみれの家だ。
　家のことに興味を示さず軍事に入れこむ伯爵は、訓練だ演習だといって別邸に入り浸り、めったに屋敷へ戻ってこない。戦時中はそれでよかったのだろう。功績を上げれば報奨金がもらえたし、ほかの貴族たちからの貢ぎ物が絶えることはなかったという。
　だが、皮肉にもリュース伯爵の戦果がこの国に平和をもたらしたことにより、リュース家の収入は領地からの税だけになってしまった。

それでも問題はないはずだった。終戦の際に受け取った多額の報奨金があり、未来の王太子妃を出した家として社交界で揺るぎない地位を築いていたのだから。

「何も知らないんだ……あいつらは何も……」

シェザムは早足で廊下を進みながら、滲む汗と涙を乱暴に拭う。

「いまなら、まだ可能性があるかもしれない。伯爵がお嬢様の死で心を入れ替えてくだされば。そうすれば」

そう口にしながらも、青年は逃れられない破滅への予感に全身を震わせていた。

リュース伯爵　一

「ロロナが死んだだと？　どういうことだ！」

別邸で訓練中だったリュース伯爵は持っていた大剣を取り落とし、大きく目を見開いた。

「私の可愛い娘が死んだなどと世迷事を！　切り捨てられたいのか!?」

「本当です！　偽りではありません！　このように死亡証明書が……」

ロロナの死を告げに来た使者は真っ青な顔で、一枚の書類を伯爵に差し出した。

その書類には、ロロナが乗っていた馬車の事故で死亡したという事務的な文面が記されている。

「ご遺体はあまりに状態がひどく、教会で処置をして安置しております。ですから、葬儀の手配を……」

「そんな馬鹿な話があるか!!」

伯爵の恫喝に、使者は短い悲鳴を上げて目を剥くとその場で気を失ってしまった。

老いたとはいえ、戦場の鬼と呼ばれたリュース伯爵の迫力に耐えられなかったのだ。

「ロロナ……ロロナ……あああ!!」

伯爵は倒れた使者には目もくれず、書類を握りしめながら大粒の涙をこぼした。

鍛えあげられた巨躯に日に焼けた顔立ち。短く刈りあげた銀髪には白いものが交じっているが、雄々しいと表現するのがふさわしい壮齢の男が、声を上げて泣きじゃくっている。

伯爵は幼い頃から、頭を使って考えることが苦手だった。

いくら勉強しても身につかず、貴族らしい立ち居振る舞いを説明されてもピンとこない。

仕方がないから、唯一の特技ともいえる剣を握って身体を動かすことに己のすべてをつぎこむことに決めた。

そのおかげでいつの間にか国随一の強さを誇るようになり、最前線で指揮を執る一軍の将にまで登りつめた。

強い男こそが有能という戦乱の時代、伯爵はめきめきと出世していく。

親同士が決めた縁談で得た妻は、印象的な菫色の瞳以外は平凡な女であったが、寡黙で従順なところが気に入っていた。

そして、ロロナが生まれた。

自分と同じ銀の髪と妻と同じ菫色の瞳をしていなければ、血がつながっているとは信じられない

ほど美しく愛らしいロロナに、伯爵は夢中になった。
戦えば褒められ、帰宅すれば従順な妻と愛らしい娘がいる暮らしは、伯爵にとってこの世の春だったのだろう。
だが、伯爵が戦場に出ている間に悲劇が起きる。戦で居場所を失い、賊と化した集団が伯爵家に押し入り家財を盗み出した挙句、伯爵夫人の命を奪ったのだ。赤ん坊だったロロナの命が助かったのは不幸中の幸いだった。
伯爵はよき妻で母だった伴侶を亡くし、落胆した。怒りに任せて犯人と思しき賊の一団を壊滅に追いこんでもなお、収まらぬ悲しみと絶望に沈み、心と身体を荒らした。
そんな伯爵を周囲は不憫だと憐れみ、とても優しくしてくれたのだ。
「俺が、かわいそう？」
人々からかけられた言葉に、伯爵は生まれて初めて人に寄り添ってもらい、愛されたような気分になった。
周囲が必死に自分を励まし、慰め、支えようとしてくれるのが、たまらなく嬉しかったのだ。
妻を亡くした憐れな男として、思い切り不幸に酔うことができた。
多少の暴言や危うい行いも、まだ気持ちが落ち着かないのだから仕方がないと許された。誰もが献身的に伯爵を甘やかし、大切にしてくれた。
そして伯爵は一人の女性と出会う。貴族ではないが、伯爵が出会ったどんな貴婦人よりも美しく、上品で優しい女だった。伯爵は迷わずその女を娶った。ロロナに新しい母が必要だという建前とともに。

だが、その女は結婚した途端、煩わしい存在になり果てた。金を使うことばかり考え、伯爵にあれこれと口うるさい。しかも産んだのはまた娘。息子を欲していた伯爵はその娘をロロナほど可愛いとは思えなかったこともあり、逃げるように軍事に没頭した。
部下を厳しく鍛えあげることが楽しくて仕方がなかった。息子のように可愛がった部下たちを戦場に投入し、彼らが死んだと聞けば何をおいても真っ先に駆けつけ、その死を悼んだ。情に厚い将として、伯爵の地位と名声は揺るぎないものになっていく。
気がついた時には戦は終わり、たくさんの褒賞に加え、ロロナが王太子と婚約することまで決まっていた。
そこが伯爵の人生の頂点だった。
だが、平和な時代に粗暴な男は浮くものだ。
最初は温かく伯爵を出迎えてくれた社交界の面々は、いつまでたっても軍人気分の抜けない伯爵からだんだんと離れていった。
自らを飾り立てることに忙しい妻は伯爵に見向きもしないし、その妻によく似たもう一人の娘は、伯爵を怖がっているのか近寄ってくることもない。
唯一の癒しはロロナだが、王太子妃教育のせいでなかなかともに過ごす時間はなかった。
だから別邸を購入し、自分と同じく居場所をなくした兵士あがりを集め、訓練の真似事をして心を慰めた。

様々な武器を買い集め、別邸を砦のように作り変え、自分の王国を手にいれた幼子のように没頭した。

だが、心は満たされない。

戦があればよかったのに、と思うがそれを口にしてはならないことだけは足りない頭でも理解していた。

伯爵が思い出すのは、最初の妻が死んだ時のことばかり。

心にぽっかりと空いた喪失感を、周囲が必死に埋めてくれたあの甘美なる日々。

いっそいまの妻が死ねば満たされるかと伯爵は考えたが、想像してみてもどうにもうまくいかない。もとより交流らしい交流もないのだ。妻が死んだところで、悲しめるとも思えなかったし、周りが憐れんでくれるかどうかもわからない。

だが、ロロナなら？

美しく聡明で非の打ちどころのない娘。社交界で姫と呼ばれ、未来の王太子妃として期待されているロロナを失ったとなれば。

きっと周囲はまた伯爵を憐れみ、子どものように甘やかしてくれるだろう。

「ロロナ！　ロロナ！」

伯爵は声を上げて泣いた。それを周りが見ていると知っていたから。

商人ゼリオ　一

伯爵令嬢ロロナの死を告げるニュースは、貴族のみならず平民の間でも大きな話題になった。街で配られた新聞には、昨夜の婚約破棄騒動と事故を関連づけたセンセーショナルな記事が躍っている。

王都でも有数の商会であるミイシ商会の商会長ゼリオは、その記事を見つめて大きく目を見開いた。

「そんな……ばかな……！」

新聞を握りしめ、わなわなと腕を震わせる。

額に滲んだ脂汗がぼたりと落ちて机に染みを作ったが、拭うこともしない。おそらくいま、どんな儲け話が飛びこんできたとしてもゼリオは動くことができなかっただろう。

ゼリオが商会長を務めるミイシ商会は、ほんの数年前までは商会を名乗るどころか表通りに店すら持てないささやかな商いをしていた。旅商人だった父親が、結婚を機に王都に腰を据えてはじめた商売だ。父から仕事を引き継ぐかたちで商人の肩書きを得たゼリオだが、彼は商人らしい狡猾さも度胸も持ち合わせていない平凡な男だった。

目利きの才能だけはあったらしく、いい品を見つけることはできたが、人の好さのせいで商機を逃しては、儲けの種を奪われる日々。

だが、いまのゼリオは王都において絶大な発言権を持つ商人にまで成長していた。
「ふはは……これでこの商会はとうとう私だけのものになった！」
新聞を投げ捨てたゼリオは天井を見あげ、壊れたおもちゃのように高らかに笑い出した。
数年前のある日、突然訪ねてきた美しすぎる少女がゼリオの運命を変えた。それがロロナだ。
あまりの美しさに、ゼリオはとうとう天使が自分を迎えに来たのかと勘違いしたほどだ。腰まで伸びた銀色の髪に、紫水晶のように輝く菫色の瞳。精巧なビスクドールを思わせる姿に、呼吸をすることすら忘れたあの一瞬を、ゼリオは鮮明に覚えている。
ロロナはゼリオに手を差し伸べると、静かに「商売をしましょう」と言ったのだ。
ゼリオはなぜかその問いかけに頷いていた。それが正しいと直感したからだ。
それからの日々は、まるで魔法にかけられようにすべてが順調だった。
指示通りに取引をするだけで、笑いがこぼれるほどの利益が転がりこむようになった。
ほんの数か月でゼリオがそれまでに出した損失の穴が埋まり、気づけばあっという間に大金持ちの仲間入り。増やした資産を元手に商売の手を広げ、大通りの一等地に商館を建てることができた。
貴族との付き合いも増え、いつしかゼリオは王都の流通に欠かせないほどの大物と呼ばれるようになっていた。
「ロロナお嬢様、貴族相手の商売はあなたが関わるべきでは？」
商会が大きくなりはじめた頃、ゼリオはロロナにそう尋ねたことがあった。
平民であるゼリオよりも、伯爵家の令嬢であり未来の王太子妃であるロロナが関わるほうが、信用度は高くなる。より商売の質を高みに押しあげることができるのは間違いない。
平和になったニルナ王国では貴族が商売に関わることも増えた。女性であっても事業を手掛けるのは珍しくない時代がすぐそこまで来ていることをゼリオは感じていた。
出会った時、ロロナはまだあどけない少女だった。だから大人であるゼリオに商売を託したのだろうと考え、いずれはすべて彼女に返すことになるものとばかり思っていた。
もう自分は必要ないのではないだろうかという不安から出た言葉に、ロロナは予想に反して小さく首を振ったのだ。
ロロナがミイシ商会に関わっていることを知るのは、初期の頃から取引のあるほんのわずかな顧客だけ。
どんなにけしかけても、彼女は表舞台に立つことを拒み、商会と自分の関係を表沙汰にしようとしない。
周囲から「商会長」と呼ばれ、これまで自分を見下してきた人々から手のひらを返すようにすり寄られるようになったゼリオは、ある考えに取り憑かれるようになった。
もうロロナは必要ないのではないか、と。
ロロナにはミイシ商会の収益から三割を相談手当として渡している。それはロロナとゼリオが最初に交わした契約だ。最初は納得できた。むしろたった三割でいいのかと不安に思うほどだった。
商会の成功はすべてロロナの手腕によるものだったから。
だが商会が大きくなったいまでは、ロロナの判断が必要な場面はずいぶん減っていた。部下も育

ち、これまでの経験を生かしてゼリオの独断で大きな金を動かすことも容易になった。
それなのに、最初の契約に期限を設けなかったせいで、いまだに収益の三割をロロナに渡し続けなければならない。
それに加え、一定の金額以上をつぎこむ大きな商談にはロロナの許可が必要だという契約も交わしていた。忙しいロロナと相談できぬままに流れてしまった契約はいくつもある。
もはやいまのゼリオにとって、ロロナは邪魔な存在でしかなかった。
「そうだ……契約書!!」
我に返ったゼリオは急いで金庫を開けると、ロロナと交わした契約書を取り出す。
この契約書は絶対のものだ。教会にも複写があるため、ゼリオの一存で修正することはできない。ずいぶん古くなった契約書に書かれた文言を目で追っていたゼリオは、は、と喜色めいた吐息をこぼし口元をゆがめる。
「くくっ……！　お嬢様、あなたはなんて……なんて素晴らしいお人だ」
契約書の末尾に書かれた一文が、ゼリオには輝いて見えた。
『契約者のどちらかが死亡した時点でこの契約は破棄される』
ゼリオは天を仰ぐ。この先、商会が得る収益はすべてゼリオ一人のものだと証明された。大きな契約にロロナの意思確認は必要ない。
もう意味をなさなくなった契約書を破り捨て、ゼリオはまるで踊り子のようにステップを踏む。
それは己の新しい門出を祝うかのように楽しげなものだった。

管財人シェザム　二

「そんなに急いでどこへ行こうというのですか」
馬車に乗りこもうとしていたシェザムを、甲高い声が引きとめた。
それが誰の声なのか、考えるまでもない。シェザムはため息を吐き出しそうになるのを必死にこらえながら、ステップにかけていた足を下ろして声がしたほうへ向き直る。
「これは奥様……今日もお美しく……」
「余計な口は利かなくてもいい。私の質問に答えなさい！」
耳障りな声に耳を塞ぎたくなるが、曲がりなりにも伯爵夫人に対してそんな態度を取るわけにはいかない。
シェザムは鞄の持ち手を強く握りしめると、なるべく憐れっぽく見える表情を作りあげて伯爵夫人であるベルベラッサに視線を向けた。
飴色の髪を結いあげ派手な衣装と装飾品に身を包んだベルベラッサは、花盛りを過ぎてなお威圧的な美しさを持っていた。
その首もとで悪趣味な輝きを放っているイエローダイヤモンドのペンダントに気がついたシェザムは、表情を変えないようにするのがやっとだった。
（そのペンダントの購入資金を捻出するために馬を何頭手放したかなど、この女は知りもしないの

だろうな！）

ある日突然、聞いたこともない商人から送りつけられてきた請求書の金額にシェザムは文字通り卒倒した。

それは、伯爵が飼育している軍馬数十頭にも値する額だった。

数年前ならば良質な軍馬数頭で済んだかもしれないが、平和な時代では気性の荒い軍馬の価値は下がる一方。伯爵に気づかれないように馬の買い手を探したシェザムの苦労など、ベルベラッサはまったく知らないだろう。

しかもイエローダイヤモンドは売り買いが禁止されている禁制品。

そんなものを堂々と身につけているベルベラッサの姿は、いまのシェザムにとっては唾棄したいほどに忌々しいものでしかない。

「……伯爵様のところです。その、ロロナお嬢様の件で」

「ああ。そういえば死んだのでしたね、あの子」

ベルベラッサは片眉を上げ、不満げに鼻を鳴らす。

「婚約破棄を告げられたというだけでも外聞が悪いのに、事故死だなんて。仮にも王太子の婚約者だったのだから、死に様くらいは美しくあってほしかったわ。ルミナにだって悪影響よ」

「……っ！」

ベルベラッサの言葉には、仮にも義理の娘であったロロナの死を悼む色は欠片もなかった。それどころか、その死に様にさえ文句をつけるとは。

シェザムは怒りを表情に出さぬよう、必死に奥歯を噛み締めた。

ここで感情を露わにしてベルベラッサを怒らせてしまえば、足止めどころでは済まない。一刻も早く伯爵と会って話をしなければならない理由がシェザムにはあった。

「まあいいわ。結果としてあの子が死んでくれたおかげで、このリュース伯爵家はルミナのものになるわけですし、感謝しなくては。そうでしょうシェザム？」

「……ええ」

「旦那様に会うのもその手続きのためかしら？　ロロナ名義の財産もルミナのものになるのよね？」

「そうです。お嬢様……ロロナお嬢様の名義になっている書類を書き換えるために伯爵様の同意が必要なので、確認をしていただきたくて」

「なるほどね。ならば急ぎなさい！　何をぼさっとしているの！」

自分で呼びとめておきながらなんと身勝手な！　と叫びそうになったが、シェザムはわざとらしく何度も頭を下げ、急いで馬車に乗りこむ。

これ以上ベルベラッサと同じ空気を共有することに耐えられなかったからだ。

御者が扉を閉めると同時に、深く長い息を吐き出し、頭を抱える。

動き出した馬車の振動がなければ、その場で気を失っていたかもしれない。

「……これから先、僕はどうすればいいんだ」

父の跡を継ぎ、いまのロロナと同じ十八歳でリュース家の管財人となったシェザムを待っていたのは、破綻寸前まで追いこまれた財政状況だった。

領地経営や財産管理に無頓着な上、いまは無意味な軍事遊びにばかり金をかける当主。どんな贅沢をしても許されると思っている伯爵夫人。

シェザムは彼らから押しつけられる請求書を処理するため、少ない財産をやりくりするだけで精一杯だった。ほんのわずかな油断で伯爵家は没落する。そんな綱渡りの日々は、シェザムの心から感情を奪い取り、生きる気力すら消し去ろうとしていた。

シェザムが二十歳になったその日、とうとう使用人たちに払うべき給金すら底をついた。ことが露見すれば皆逃げ出し、伯爵家は大変な騒ぎになる。そうなれば管財人であるシェザムは責任を問われるだろう。命が助かったとしても、まっとうな人生は二度と歩めない。

絶望に打ちのめされたシェザムは、普段は立ち入りを禁止されている庭園のベンチに腰かけ、空を見つめていた。自分の心とは真逆に晴れ渡る青空が憎らしくて、このまま死んでしまおうかとすら思った。

「誰かいるの？」

それが自分に向けられた言葉だと、シェザムは最初理解できなかった。

虚ろな気持ちで顔を上げると、すぐそばに誰かが立っているのがわかる。その人の着ている服がお仕着せではなく品のいいドレスだと気がつき、シェザムは青ざめた。使用人の分際でベンチに腰かけていることを見咎められると。

「シェザムではないですか。どこか具合でも悪いの？」

ベンチのすぐそばに立っていたのは、ロロナだった。

その菫色の美しい瞳がまっすぐにシェザムを見つめ、わずかに揺れているのがわかる。

まだたった十二歳だというのに凛とした気品あふれる立ち姿に、絶望を忘れシェザムは見惚れてしまった。

本来ならばすぐに立ちあがって頭を下げなければならないのに、シェザムはそれができなかった。

「ロロナ、お嬢様？」

シェザムにとってロロナは雲の上の存在だった。美しく聡明な令嬢にして、未来の王太子妃。社交や勉強に忙しいこともあり、何度か遠目に姿を見たことしかない存在だった。

だが、シェザムは知っていた。ロロナはこのリュース家の唯一とも言える光だと。

無駄遣いどころかめったにものを欲しがらず、ドレスを仕立てるのもシーズンに一着程度。

伯爵夫人やもう一人の令嬢のように、使用人たちを無暗に叱りつけることもない。

そんなロロナが名前を知ってくれていた上に、自分を案じてくれたのだ。

「お嬢様……！」

シェザムは瞳から涙をあふれさせ、伯爵家の窮状をロロナに訴えていた。

もう限界だと。このままでは屋敷を手放しても何も残らないかもしれないと。

みっともなく泣きじゃくりながらシェザムがすべてを伝え終えると、ロロナは「ごめんなさい」と言って小さな手でシェザムの背中をさすってくれた。その言葉とぬくもりは、疲れ切ったシェザムをもう一度だけ頑張ってみようと思わせるほどに癒してくれた。

そしてその翌日、破産を告げる覚悟で目を覚ましたシェザムのもとに、自分の装飾品を売り払っ

て得た金を抱えたロロナがやってきた。これを使って使用人たちに給金を払うようにと告げた少女の姿を、きっとシェザムは死ぬ間際にさえ思い出すだろうと確信している。

そのうちにロロナは平民の商人とともに商売をはじめ、毎月一定額の金銭を伯爵家に入れてくれるようになった。金が足りなくなれば工面する術を一緒に考え、やむなく使用人を減らさなければならない時には彼らが路頭に迷わぬように新しい勤め先を必ず見つけ出してくれた。

借金をする時も、ロロナが商売を通じて知った相手から破格の条件で契約ができるように取り計らってくれていたのだ。

それはすべて、ロロナという信用に足る存在が担保になった取引だった。

この六年間。ロロナがいたからこそリュース伯爵家もシェザムも生き残ることができた。

だがロロナが死んだ以上、この先新しい借入先を見つけることは不可能だ。

有能な商人であり未来の王太子妃ロロナがいないリュース伯爵家に、誰が協力するだろうか。

「ロロナお嬢様……」

絞り出すような声でロロナの名前を口にしたシェザムは、自分の視界がゆがんでいることに気がついた。

勝手にあふれ出す涙で前が見えなくなってくる。

それはロロナの死が招く、伯爵家の未来に恐怖したからではない。

「お嬢様……どうして死んでしまったのですか……」

シェザムはようやく、自分が悲しみに打ちのめされていることに気がついた。

息をするのがやっとなほどの深い苦しみに襲われていることを、身体がようやく理解したのかもしれない。

「あなたがいなくなったら、僕はどうすればいいか、もうわかりません」

笑うことも怒ることもしないロロナ。でも本当は誰よりも優しく、情け深い女性だということをシェザムは知っていた。

いつも礼儀正しく親切で、誰が相手でも態度を変えることがない。

彼女を大切にしない家族や婚約者の態度にも、ただ悲しげな色を瞳に滲ませるだけ。

もっと感謝を伝えればよかった。どれほどロロナに救われていたかを言葉にすればよかった。

彼女にばかり重荷を背負わせていたことに対する後悔で胸がつぶれそうで、自分の無力さが情けなかった。

シェザムは両手で顔を覆い、声を上げて泣いた。

地面を削る車輪の音がその声をかき消しても、シェザムの悲しみが消えることは当然なかった。

王太子ベルビュート　二

「ベルビュートさま！　お姉さまが!!」

目を潤ませたルミナがベルビュートを訪ねてきたのは、もう日暮れも近い時間。

厚かましくも王族の居住区画まで侵入してきたルミナに、護衛の兵士や執事たちは渋い顔をして

いる。
　ロロナが死んだという衝撃的な事件の直後でなければ、許されるはずもない。
「ルミナ……俺も知らせを聞いて驚いていたところだ。一体何があった？」
「私にも詳しいことはわからないのです。式典の会場を出た後、お姉さまはどこかへ行ったらしくて、昨日はお帰りになりませんでしたから」
「あの後ロロナは帰宅しなかったのか？　そのような報告は聞いていないぞ」
　ルミナの言葉に、ベルビュートは眉をひそめる。
　貴族令嬢が理由もなく帰宅しないなどありえない話だ。それに娘が帰ってこなければ、事故や事件に巻きこまれた可能性を考えて、貴族院に捜索願を出すのが普通。
　だが、ルミナの口ぶりから捜索願を出してはいないようで、ベルビュートにも報告はなかった。
「ええ……ほら、あんな騒動の後だったのでどこかで気を紛らわせているのかと思って。それにお父さまも不在だったものですから」
「ああ……」
　リュース伯爵家の現状を知っているベルビュートは、疑問に思いつつも納得するしかなかった。
「そうか……ロロナがどこに行っていたのかはわかっているのか？」
「いいえ。でも、式典を後にしたお姉さまの馬車が逃げるように郊外へ走っていったという目撃情報がありました。きっと婚約破棄があまりにショックで、適当に馬車を走らせたのかも」
　本当にそうなのだろうかという不安がよぎるが、確かめる術はない。

　どうしてもっと調べないのかという思いで心が苛立つが、ルミナを責めても仕方がないとベルビュートは首を振る。
「事故がわかったのは、今朝なんだな」
「はい。我が家の馬が王都のはずれで迷っているのを、警備兵が見つけたと聞いています」
「馬だけが？」
「ええ。それを不審に思い街道を調べたところ、横転した馬車が見つかって……」
　そこまで語るとルミナはううう、と泣きながら両手で顔を覆ってしまう。
　姉を失った悲しみに震えるそのいじらしい姿に胸を打たれ、ベルビュートはルミナをそっと抱き寄せた。
　そのぬくもりを感じながら、ベルビュートは初めてルミナに会った日のことを思い出していた。
　微笑むことのないロロナと違い、いつも愛らしく笑っているルミナは、王太子として息苦しい日々を送っていたベルビュートにとっての陽だまりだった。
　初めて二人が顔を合わせたのは、ロロナがデビュタントを迎えた日のことだ。
　ロロナとのダンスを終えたベルビュートは、「お姉さま！」と可愛らしい声を上げて駆け寄ってくる少女に目を奪われた。
　ふわふわした飴色の髪と蜂蜜色の瞳をした少女は、ロロナとは何もかも正反対だった。あどけない顔立ちは愛くるしく、見ているだけで胸がぎゅっと締めつけられる気分になる。
「ルミナ。あなたはまだここに来てはいけないのに」

「だってお姉さまのデビュタントですもの！　お祝いしたくって。お母さまもいいと言ってくれたのよ？　そんなにだめだった？」
「困った子ね……。ベルビュート様、この子は妹のルミナでございます。ルミナ、王太子殿下にご挨拶を」
「初めまして、ベルビュートさま！　ルミナ・リュースと申します」
少々ぎこちないものの、練習の成果が見えるしっかりとした挨拶に、ベルビュートは頬をゆるませた。
姉であるロロナが女神にたとえられるのなら、ルミナは天使だろう。
その日から、ルミナはよくロロナにくっついて王城にやってくるようになった。
ロロナはいつもルミナを窘めて帰るように促していたが、ルミナは「仲間外れにしないで」と瞳を潤ませるものだから、ベルビュートはついついルミナの味方をしてしまう。
いつも完璧なロロナがルミナに困らされている姿を見るのが、少しだけ楽しかったのもある。
ある日、ベルビュートはルミナが瞳いっぱいに涙をためて庭園に座りこんでいるのを見つけた。
何ごとかと駆け寄り、その小さな背中を撫でてやる。
「私、お姉さまみたいに全然うまくできないの。帰ったらきっと叱られるわ」
「誰がこんな可愛い君を叱るというのだい？」
「……それは……」
言いよどむルミナに対して、ベルビュートは手を貸してやりたい一心で根気強く問いかける。

その熱心さに折れたルミナは、実は……と恐ろしい事実を口にした。
「ロロナが君を？」
ルミナは後妻の娘だからと、ロロナにずっと虐められているというのだ。
両親の前ではベルビュートの前と変わらず清廉で貞淑な娘を演じているが、ひとたび二人きりになればルミナの出自を嘲り、なじり、不出来な妹だと見下して叱り飛ばすのだという。鞭で打たれたこともあると言って見せられた真っ白な脚には、その言葉通り真っ赤な筋がくっきりと残っていた。
その魅惑的なコントラストに激しく動揺しつつも、最初はルミナの言っていることが信じられなかった。
あのロロナが、異母妹を虐待するなど到底思えない。
「おねがい！　誰にも言わないで！」
だが怯えを滲ませ叫ぶルミナが嘘を言っているとも思えなかった。
それからもルミナはロロナにされたことをベルビュートに訴えてきた。
実際、ロロナが廊下でルミナに何かを指摘する現場を見たこともある。
表情一つ変えず淡々と何かを告げるロロナの前で、ルミナはかわいそうなほどに小さくなり涙を潤ませていた。
「やめないか、ロロナ」
気がついた時には、ベルビュートはルミナを庇っていた。

その瞬間、ロロナの表情が困惑したようにゆがんだのをベルビュートは見逃さなかった。
どんな時も冷静なロロナが動揺した。
もうそれだけで、ルミナの言葉はベルビュートの中で真実になっていた。
完璧なロロナが、妹を虐めている。
女神のようだと思っていた女の歪さを知った喜びがベルビュートの全身を震わせる。
それからはもう、ルミナを守り慈しむことがベルビュートの生きがいになっていた。
ルミナはベルビュートを否定しない。息抜きに興じても、一緒になって楽しんでくれる可愛いルミナ。
いつしか、どうして自分の婚約者がルミナではないのかと思うようになっていた。
ベルビュートが十六歳となり王立学園に入学してからも、ふとした瞬間に頭に浮かぶのは婚約者のロロナではなく、いつも自分に優しいルミナの顔だ。
翌年ロロナが入学してきたことで、ベルビュートの感情はどんどんルミナに傾いていく。
同学年でないことが救いに思えるほどに、ロロナは優秀な生徒だった。
常に学年首席を維持し、品行方正。
周りにも自分にも厳しい姿は、王族であるベルビュート以上に気品にあふれていた。
さすがは王太子の婚約者だ！　と誰かがロロナを褒めそやすたびに、ベルビュートの心には仄暗い気持ちが鬱積していく。
誰も何も言わないが、周囲はロロナとベルビュートを比べ、平凡な王太子と蔑んでいるのではと

いう疑心暗鬼に囚われるようになっていた。
ベルビュートが最上学年になった年、新入生としてルミナが入学してきた。
誰もが王太子であるベルビュートに一線を引いた態度を取る中で、ルミナだけはいつも態度を変えず明るく接してくれた。
そばにいるのならば、ロロナのような近寄りがたい女より、体温を感じられるルミナがいい。
ベルビュートの心は完全に、ルミナに傾いていた。
そんな矢先、ある二通の密告文がベルビュートのもとに届いた。
――伯爵令嬢ロロナ・リュースは、貧民街に出入りし怪しげな商売をしている
――リュース家はいまでは禁じられている武器の購入を行い、禁制品にも手を出している
両方とも、最初はよくある誹謗中傷かと思っていた。
だが、実際に調べさせたところそれらはほとんど真実で、ロロナは貴族令嬢が立ち入るべきではない市井の商会に出入りし、驚くべきことに平民の商人と懇意になり、商売に手を染めていたのだ。
いくら時代が変わろうとしているといっても、未婚の貴族令嬢が平民の男と同じ場所で時間を過ごすなどありえない愚行だ。
リュース家の当主である伯爵がいまだにかつての戦を忘れられず、軍事ごっこをしているというのも耳の痛い話だった。加えて禁制品を買いあさる伯爵夫人の行いが社交界に広まれば、リュース伯爵家がつまはじきにされることは明白。
何も知らぬままにロロナと結婚していたら、王家は大恥をかいていたことだろう。

（伯爵や夫人の所業はどうにでもできる。むしろ、この秘密をうまく使えばロロナとの婚約破棄に使えるかもしれない）

リュース伯爵は軍人としては優秀だが、貴族としての駆け引きは苦手だ。

適当に脅せば、軍事ごっこから手を引き婚約破棄の書類にサインをするだろう。

同時にルミナの母が買い集めている禁制品も手放させればいいだけの話だ。

まだ大きな噂になっていないのならば、王家の力をもって握りつぶせばいいだけのこと。

そう閃いてしまったベルビュートは、もう止まれなかった。

あの完璧なロロナのプライドを粉々にするため、卒業記念式典の最中に素行の悪さを追及し、婚約破棄を告げればいい。

もし口答えしてくれば、伯爵と夫人の秘密を匂わせて黙らせれば済む。そうすれば逆らわないはず、だと。

だが予想に反しロロナは抵抗するどころか、婚約破棄を嫌だとも言わなかった。

最後まで取り乱さず、美しいままだったロロナ。

そのロロナがあっけなく死んだ。

「……本当に、事故だったのか？」

「馬が何かを避けようとした弾みに車体が横転したのではないかという話でした。御者は衝撃で道に投げ出されたおかげで一命をとりとめたそうなのですが、お姉さまは車体と一緒に……ああ、おいたわしい……」

泣きじゃくるルミナの言葉をどこか遠くに聞きながら、ベルビュートは胸の奥がざわめくのを感じていた。

最後にロロナが見せた凛とした表情と、なんの未練も感じさせない背中が鮮明に蘇る。

あの女神のような美しさを二度と目にすることができないという事実が、心の奥底を震わせた。

「ベルビュートさま……これからどうなるのでしょうか」

震える声に、ベルビュートは慌てて思考を止めて腕の中のルミナを見つめた。

初めて会った時から変わらず可愛らしいルミナ。

だが、その輝きがなぜか突然衰えたように思えてしまう。

「……しばらくは喪に服さねばならぬことだけは事実だ。まだ調べるべきことや手続きも多い。しばらくは会うのを控えたほうがいいだろう」

「そんな」

「しかたないであろう？」

不満そうなルミナの表情に、ベルビュートは初めて苛立ちを感じた。

いくら婚約破棄を宣言したとはいえ、まだ書類上の婚約者はロロナのまま。

ルミナと婚約を結ぶにしても、伯爵や伯爵夫人の問題を片づけてからでなければ先に進めない。

そんなこともわからないのか、と。

「とにかく、護衛をつけるから日が暮れる前に伯爵家に帰るんだ。明日にでも使いをやる。伯爵たちとも話をしなければならない」

ルミナはベルビュートの言葉にしぶしぶといった様子で頷き、ようやく部屋を出ていく。
その背中を見送りながら、ベルビュートは言い知れぬ不安に襲われていた。
ロロナの死によって問題から解放され、明るい未来へ歩めるはずなのに、泥沼に片足を突っこんだような不快さが消えない。
「大丈夫。なんの問題もないはずだ」
己に言い聞かせるように呟いて、ベルビュートはきつく目を閉じた。

異母妹ルミナ　二

「ベルビュートさまったら冷たいんだから！」
なかば追い返されるように強引に馬車に乗せられたルミナは、先ほどまで一緒にいたベルビュートの態度を思い出し、頬を膨らませた。
せっかく邪魔者だったロロナがうまく片づいてくれたのに、どうして素直に喜んでくれないのか。人目があるとはいえ、あんな追い出し方をされるとは思ってもいなかった。
「ようやく私の番が来たのよ……絶対に幸せになるんだから」
親指の爪に歯を立てながら、ルミナは遠ざかっていく王城を車窓から見つめる。
ルミナが物心ついた時には、ロロナは王太子妃教育のため毎日のように王城に通っていた。
それがうらやましくてたまらなかった。

綺麗なドレスを着て豪華な馬車に乗ってお城に行く。絵本に出てくるお姫様そのもののロロナ。
どうして自分は連れていってもらえないのかと駄々をこねたのは一度や二度ではない。
ある日、いつもならばロロナを迎えに来るだけのはずの馬車から、一人の男の子が降りてきた。
燃えるような赤い髪に綺麗な緑色の瞳。自信と優しさに満ちた笑顔と、背中をまっすぐに伸ばして歩く姿は光り輝いて見えた。
「王子さまみたい……！」
一目惚れだった。その姿をずっと見ていたくてたまらなかった。
こっそり男の子を追いかけると、その子はあろうことかロロナの手を取りその甲に口づけたのだ。
「……!!」
ルミナはようやく、その男の子こそがロロナの婚約者であるベルビュートだと理解した。
ベルビュートはロロナを迎えに来たらしく、しきりに何か話しかけている。優しく笑ってロロナを褒めているのかもしれない。それなのにロロナはいつもと変わらず無表情なまま。ベルビュートはそんなロロナの態度に困ったように首をかしげていた。
「ルミナなら、あんな顔させないのに！」
あんな素敵な人の前でどうして微笑まないのか、ルミナにはわからなかった。自分ならもっとうまくやれるのに。
苛立ちを感じながら、ルミナはロロナとベルビュートの姿を遠くからずっと見つめ続けていた。
「どうして、どうしてなのお母さま！」

その夜、ルミナは泣きじゃくりながらベルベラッサに訴えた。どうして自分がベルビュートの婚約者ではないのかと。

「かわいそうなルミナ……！」

ベルベラッサも自分の娘が選ばれなかったことが悔しかったのだろう、美しい顔に怒りを滲ませながら、二人の婚約にまつわる話をしてくれた。

戦が終わり、王家からリュース伯爵家にベルビュートとの婚約の打診が来た時、まだルミナは赤ん坊だった。

この国では三歳になり教会で洗礼を受けなければ、貴族としての籍を持つことができない。子どもはとても死にやすいからだ。当時まだ貴族籍がなかったルミナに、王太子の婚約者として契約を結ぶ権利はなかった。

「そんな理由で？　おかしいわ、お姉さまはこの家を継ぐのに」

「まったくだわ。でも安心しなさい。あの子が王家へお嫁に行くのなら、きっとこの家の相続権はお前に譲るはずよ。いくら冷血なロロナとはいえ、妹であるお前のことは可愛いはず」

「……」

正直に言えば、リュース伯爵家の相続なんてルミナにはどうでもよかった。

ルミナが欲しいのはベルビュートだ。あの人が欲しい。あの人と結婚したい。

悔しくて悔しくてたまらなかった。

そのうちに、ロロナが相続権すらルミナに渡す気がないと知らされた時の絶望は言い知れないものだった。

だからルミナは行動を起こすことにした。

ロロナのデビュタントに無理やり同行し、ベルビュートに挨拶をしたのだ。

誰よりもロロナのそばにいたルミナにはわかっていた。ロロナはベルビュートを愛してはいない。ベルビュートもまた、冷たいロロナの心を測りかねて義務以上の感情を抱けないままでいるということを。

だから、ベルビュートの心を自分に向けるのは簡単だった。好きだという想いを隠さずに声や笑みに含ませるだけでいい。ロロナとは真逆に無邪気に笑って怒って、王太子という立場など関係なく一人の人間として彼が必要だと全身で訴えた。

ロロナに虐められているという偽りの告白をするために、自らの足を鞭で打った日もあった。

ベルビュートの視線が、ロロナではなくルミナに真っ先に向くようになったと気がついた時の歓喜をなんと表現したらいいだろう。

愛してほしい人が自分を選んでくれた。それがどれほど嬉しかったかなんてきっと誰にも理解できない。

母は甘やかしてくれるが、ルミナの教育は金で雇った乳母や家庭教師に丸投げだった。

父は最低限の挨拶をするくらいで、可愛がってもらった記憶はあまりない。

姉は勉強が忙しくてめったに遊んでくれない。

広い屋敷でルミナはいつも一人だった。自分だけを見てくれる唯一の人が欲しかった。

「お姉さまには悪いけど、全部もらうわ」
ベルビュートも、伯爵家も、両親も、これからは全部ルミナのものだ。
うっとりと目を閉じたルミナだったが、馬車が大きく揺れたことではっと瞳を見開いた。
「ちょっと、何よ!?」
声を上げれば、馬を操っている御者が焦った声で謝罪の言葉を叫ぶ。
「申し訳ありませんお嬢様！　犬が道を横切りまして……」
「もう！　気をつけなさい！」
お姉さまの二の舞いなんてごめんだわ、という言葉を呑みこみ、ルミナは唇に歯を立てる。
横倒しになった馬車の中、割れた窓ガラスや木片に顔をつぶされて絶命したというロロナ。
顔以外が無傷なことが皮肉に思えるほどの、むごい死に様だったという。
馬車を引いていた御者は投げ出された衝撃で意識を失っており、事故の原因は謎のまま。どうしてロロナの馬車があんな郊外の街道を走っていたのかもわかっていない。理由がわからないのは不安だが、たとえ真実を暴いてもロロナは帰ってこないのだから無意味だ。
窓から見あげた薄茜色の空には白い月が浮かんでいた。
淡く輝くその姿にロロナが重なり、ルミナは急いで目を閉じる。
嬉しいはずなのに、心のどこかにぽっかりと穴が空いたような気分だった。
ロロナの遺体は状態がひどいこともあり、まだ教会に安置されている。いずれは迎えに行かなければならないだろうが、それを考えるのは自分の役目ではないとルミナは首を振る。

**立ち読みサンプル
はここまで**

「お姉さまは死んだ……死んだのよ……それでいいじゃない」
本当に姉は死んだのだろうか。疑問が一瞬だけ浮かぶ。
遺体を確認すべきだと感情が訴えるが、そんなことをする必要はないと理性が叫んだ。
これから幸せになるのだ。ロロナのことは忘れよう。姉の分まで幸せになればいい。
そうルミナは自分に言い聞かせ続けた。

リュース伯爵　二

「ロロナ……ああ、ロロナ」
突然知らされた可愛い娘の死。
打ちひしがれる伯爵の姿に、周囲の者たちもつられて涙ぐんでいた。
屋外だというのにその場にうずくまって泣きはじめた伯爵を部下たちは必死に慰め、ロロナの死を憐れむ言葉をかけていく。
そのたびに、伯爵は自分の心にあった大きな穴が埋められていく喜びを感じていた。
ロロナを失った喪失感は確かに大きい。美しく可愛く完璧な娘。
小さな頃から、困らされたことは一度もない。どこに連れ歩いても、周りはロロナを称賛する。
そしてそんなロロナの父である伯爵も「素晴らしい父親だ」と褒められたものだ。
ロロナは伯爵にとって自慢だった。